



アーサー・ゴールデン

小川高義 = 訳

*Memoirs
of a
Geisha*

by Arthur Golden

さ
ゆ
り

ふゆり

ア—サ—

三澤

小川高義 訳

蘇工業学院图书馆
藏书章

下

MEMOIRS OF A GEISHA
BY ARTHUR GOLDEN
COPYRIGHT © 1997 BY ARTHUR GOLDEN
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH ALFRED A. KNOPF, INC., NEW YORK
THROUGH THE ENGLISH AGENCY(JAPAN) LTD., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

さゆり 下

一九九九年一月三〇日第一刷
一九九九年二月二五日第三刷

著者 アーサー・ゴールデン

訳者 小川高義

発行者 一原雅之

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話〓〇三―三二六五―一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4―16―318840―1

さゆり（下巻）●目次

さゆり（承前） 3

謝辞 291

特別寄稿 日本語版への著者あとがき 295

アーサーはんのこと 名倉礼子 299

アメリカ産の花柳小説——訳者あとがき 305

装帧 大久保明子
题字 寺田文正堂
摄影 杉山拓也

さ
ゆ
り

(下
巻
)

いまから考えますと、あの鰻の話を豆葉に聞いてから、私も世間を見る目が変わりましたですね。それまでは水揚げなどということは耳学問さえしておりませんで、まあ、ものを知らない初心ぶしなな小娘だったのです。以後は、蟹の院長のようなお客さんが、ああして時間とお金を祇園につき込んでいる本心が、だんだん見えてくるようになりました。こんなものは一旦知ってしまうと、もう知らないことにはできませんので、院長先生への見方も、おのずと違ってまいりました。

その夜、置屋へ戻ってから、私は初桃とおカボが帰るのを待つて二階の部屋にありました。真夜中を過ぎて一時間ほどもしたでしょうか、やっと帰ったおカボは疲れ果てているようで、ぺたぺたと階段に手をつく音が聞こえました。急な勾配を犬のように四つん這いであがるのが、おカボにはあったのです。初桃は襖をしめないうちに、ビールが欲しいと女中に言っているようにしました。

「あ、待つてや。一杯やのうて二杯にしたって。おカボにもお相伴しやうばんさせるさかい」

「姐さん、堪忍どす」と、おカボが言っています。「うち、もう何も飲みとおへん」

「そうかて、ビール飲みながら、あんたに読んで聞かしてもらお思うてんのどっせ。付き合いうもんがあるやんか。飲んでる傍わきで素面しよめんになつとられたらかなわんし、そんなん真っ平や」

ここで女中が下へ降りたようでした。ほどなく上がってきて、盆にのせたコップが音をたてています。

しばらく私は自分の部屋に坐ったまま、襖に耳をくっつけて、新しい歌舞伎役者の記事を読むおカボの声を聞いていました。そのうちに足元の危ない初桃が廊下へ出て、手洗いの戸をあけました。

「おカボっ！」と言っています。「なあ、おうどんにでもしよか？」

「へえ、いまは結構どす」

「ええから、そこらに屋台が出てへんか見といたない。あんたの分も買うてきや。付き合いいいうたやろ」

おカボはため息まじりに降りてきましたが、私は初桃が用を足して戻ったらしいのを待つてから、そうっとおカボを追いました。あれで見失わずにすんだのは、くたびれたおカボがのろろ歩いていたからです。泥が坂道をずるりと垂れるような、いかにも投げやりな足取りでした。私が追いつきましたら、びくっと驚いて、どないしたん、と言います。

「どないもせえへん……ただ、あんたに助けてほしいねん。お願いやさかい」

「千代ちゃん——」こんな名前を言うのは、もうおカボくらいなものでしたが、「悪いけど、道草くうてられへん。初桃さん姐さんがおうどんいうてはるねん。うちも付き合わんなんねん。いま何ぞ食べたたら、姐さんにかて、げーって吐きかけるかしれんけど」

「ふうん、あんたも難儀してんにやなあ。溶けかけの氷みたいやんか」おカボの顔からは疲労の色がしたたり落ちそうになっていました。着物の重みで、体が地面に沈み込むかとも思えます。私がうどん屋をさがすから、そのへんで待つていれればいいと言いましたら、おカボには否と言っ

元氣もなくて、私にうどん代を預けるなり、道端にへたり込んでしまいました。

なかなかうどん屋が見つかりませんでした。ようやく湯気のたっているうどんを二杯持って、さっきの場所まで来ますと、ぽかんと口をあけた顔を空に向け、雨水でも受けたようになつたおカボが、すっかり眠っていたのです。午前二時頃のことでした。まだ人通りが絶えたわけではありません。まとまって歩いてきた男の人たちが、めずらしいものを見たようです。まあ、たしかに、舞妓が盛装のまま、往来でぐうぐう寝ているという姿は、ちょっと見られるものではないでしょう。

うどんを置いて、できるだけやんわりと起こします。「あんなあ、お願いやさかい、人助け思うて聞いてんか。……聞いたら、いやあな気分になるかしれへんけど」

「かまへんわ。いやあな気分なんて、とうになつとるもん」

「院長先生のお座敷に、あんたもいてたやろ。初桃さん姐さんが何ぞ言うたのやろ。うちの一生がかかつてるらしいねん。姐さんがどんな嘘つかはったんやら、先生たら、うちの顔も見とうないにやて」

私は初桃を天敵のように思っていて、この晩に何をしたものか是非でも突き止めてやりたいとも思っていたのですが、そのためにおカボの口を割らせようとしたことには、申し訳ない気持ちがありました。いわば軽く突いただけでしたのに、つらい思いのおカボには、よほどにこたえたのでしょうか。みるみる涙があふれて、あの丸い頬にこぼれ落ちました。何年もたった涙が堰を切ったのかもしれない。

「千代ちゃん、うち、知らんかった」と、帯をさぐってハンカチを出します。「ちょっとも知らへなんだんえ」

「知らへなんだて、姐さんが何言わはるかいうことか？ そんな、わからいで当たり前や」

「そうやない。あないに人間がえげつのうなれるいうこっちゃ。もう、わからへん。いけずなこ
 としたい思うたら、そいだけで何でもでける根性悪なんや。ほんで、何が困るいうたら、うちが
 姐さんを慕うて見習おうとしてるもんやと決めてはるさかい、もう、かなんのやわ。慕うわけあ
 らへん。憎らしいて憎らしいて、あんな人、見たこともあらへん」

こう言っているうちにも、黄色いハンカチに白粉がべっとり移っていました。たったいま溶け
 かけの氷だったのが、どろどろの水たまりのようです。

「なあ、この通りや」と、私は言いました。「ほかに仕方があつたら、あんたに頼んだりせえへ
 ん。けど、うちかて、また女中になつて一生終わりとないねん。あの姐さんの好きにされたら、
 そないなる。うちをゴキブリみたいに踏みつぶすまで、あきらめはらへんやろ。そやし、あんた
 に手伝うてもろて逃げるしかあらへんね。踏まれたらぺしゃんこや」

こう言ったのがおもしろかつたらしく、おカボは私と一緒に笑いました。そのハン
 カチで、私は化粧の崩れた泣き笑いの顔をふいてやりました。あんなに仲の良かったおカボが、
 と思つたら私にもこみあげるものがあつて、涙を抑えきれず、結局、二人して抱き合つておりま
 した。

「お化粧、わやになつてしもたな」しばらくして私が言いました。

「ええがな。酔つ払いが来てハンカチで顔ぐしゃぐしゃにされたいうたらええねん。おうどんが
 二杯で手がふさがつてたさかい、されるままやったんやて、そないに言うとかわ」

これで話は終わりになつてしまひそうでしたが、そのうちにおカボが重苦しいため息をついて、
 「手伝うたげたいねんけど、こない時間とつてしもたし、もう急がんと姐さんが迎えに来いひん

ともかぎらへん。千代ちゃんと話してるとこ見つかったら……」

「少しだけ聞かしてくれたらええんや。うちが志ら江はんで院長先生に呼んでもろとったん、どないして姐さんにわかつたんやら、そんだけ教えてほしいねん」

「ああ、それか。あんた、ちよつと前にドイツの大使はんがどうたら言うて、姐さんにいけずされとったやろ。ところが、あんた、どこ吹く風で平氣な顔しとったさかい、きつと豆葉さん姐さんと組んでの企みがあんのやと察しはったわけや。ほんで、検番行つて、淡路海はんに聞いて、あんたのお花がどこのお茶屋についてるのんか調べはったんやな。志ら江いう名前が出たときの、姐さんの顔いうたらなあ。その晩から、うちら志ら江はんに通うて、お医者さんさがしやわ。三度目の正直で、やつと見つけたんえ」

これといつて知られたお客さんは、まず志ら江には行かないものでした。その限られた中では、すぐ蟹の院長が初桃の頭に浮かんだのです。私にもおぼろげな見当がついてきていましたが、院長は水揚げ専門の旦那として、令名を馳せていたようです。ですから、院長の名前さえ思いついたら、豆葉の意図も読めたことでしょう。

「今夜、先生に何言わはったん？ おうちら行つてしもてから、先生、うちらには口もきいてくれはらへなんだんえ」

「そやな、しばらく姐さんと先生で世間話みたいなんしやはってから、そういえば思い出したことがおすて姐さんが言わはってな。うちの屋形にさゆりいう舞妓がいてますにやけど……てなもんや。ほしたら、先生、あんたの名前聞いて、蜂に刺されたみたいに、ぎくつと坐り直さはったわ、ほんまやで。さゆりを知ってるのか言わはるさかい、へえ、そら、知ってます、うつとこに住んでますのやし……たら何たら、あとはよう覚えてへんけど、こないにも言うてやったわ……」

さゆりさんのことは、あんまりお話でけしまへんねん、じつは大事な秘密を守ってやらんなりまへんのどす……」

そう聞いて、私は冷水を浴びせられたようになりました。とんでもないことを言いふらしたに違いないのです。

「何やの、その秘密いうのん」

「さあ、ようわからへん。しょうもないことやと思うたけどなあ。近所に住んでる若い衆がどうたら、おかあさんは抱えてる妓の色事には厳しいたら、あんたとその若い衆がええ仲なんやけど、おかあさんが厳しいてかわいそうやさかい、こつそり応援したつてもかまへんのやたら……。おかあさんが留守しやはったとき、さゆりさんと若い衆に部屋を貸してやったとも言うてはった。ほいで、こんなや——ひゃあ、先生、いらんこと言うてしもうたわ、せっかく秘密にしよ思うて気張ってましたのに、おかあさんの耳にでも入ったらどないしまひょ……。ほしたら先生は、ありがたい、よう言うてくれた、いま聞いたのんは胸にたんだんど言うてはったわ」

初桃がおもしろがって奸計をめぐらした有様が、目に浮かぶようでした。ほかに何か言ったのかとおカボに尋ねましたが、それだけだったようです。

私は何度も礼を言つて、ずっと初桃の意のままに使われているのは、さぞつらかろうとも言いました。

「辛抱のおかげで、ええこともあったわ」と、おカボが言います。「つい先度やけど、うちを養女にするて、おかあさんが言うてくれはった。そやし、一生住むとこに不自由しとうないいう夢がかなうかもしれへん」

おカボが養女になると聞いて、私は口では喜んでやりながら、胸の内は苦しくなりました。

した。おかボのためによかつたと思う心に嘘はなかつたのですが、私こそ屋形の養女にならなければ、豆葉の目算が狂ってくるのです。

* * *

翌日、豆葉宅で、そんな事情を知らせました。色事云々の話を聞いたとたんに、豆葉は腹立たしげに首を振ります。私にも察しはついていましたが、あらためて豆葉が、初桃にしてやられたのだと言いました。私の寝床を荒らした鰻がいるらしいという疑惑を、院長の頭に吹き込まれたのです。

しかもおかボが養女になるというので、なおさら豆葉は苛立ちました。

「たぶん、その話、整うまでに、あと二月か三月か、そんなもんやろ。こうなったら、のんびりしてられへん。ほな、さゆりさん、もう水揚げや。まだとは言わさへんえ」

* * *

その週のうちに、豆葉がお鰻頭屋さんへ行きまして、餅菓子注文をいたしました。えくぼ、と言ってありますが、頬つぺたのえくぼと同じで真ん中にへこみがありまして、小さく赤丸がついています。そういう見かけが、へんに艶めかしいとおっしゃる方もおられますね。私が見ますと、小さな枕のようだと思えます。女の頭がのったように、やんわりと窪んでいます。疲れていて寝しなにお化粧を落とさなかつたので、口紅の赤がついてしまったというような。で、まあ、

こういうものを菓子折にいたしました、そろそろ水揚げという舞妓が、ご最頂のお客さんに配るのです。たいていは十何人か、もつとになりますか、お配りするのですけれども、私の場合には、うまくいったとしても延さんと院長先生だけでした。会長さんには差し上げられないのが、悲しかったです。でも一方では、なんだか品のないことをやっているようで、こんなものに会長さんを巻き添えにしなくてすむと思えば、悲しいばかりでもなかったのですが。

延さんにお渡しするのは簡単でした。ある晩、一力の女将さんの計らいで、延さんには早めに来ていただくことにして、豆葉と私が前庭の見える小座敷でお迎えいたしました。お心遣いをいただいて半年ほどになりますので、そのお礼を申し上げます。たとえ会長さんが来られない席でも呼んでいただきましたし、あの初桃に見つかった晩の櫛のほかにも、いろいろと頂戴したものがあつたのです。そのあとで、生漉紙きずきに包んで水引をかけた菓子折を手にとり、お辞儀してから、卓上ですべらすように差し出しました。これを延さんが受け取ってくださいましたので、また何度もお礼を申し上げて、あんまりお辞儀をしたもので、頭がふらふらしてきました。この儀式は手短なものでして、延さんは片方だけの手に箱を持って、この部屋を出ていかれました。そのあとのお座敷のほうでは、菓子折のかの字も口にされません。ああいうことがあつたので、やや緊張ぎみだったのかもしれないね。

厄介だったのは蟹の院長です。とりあえず豆葉は祇園の主だったお茶屋さんをまわって、院長があらわれたら知らせてくれるようにと頼んでおきました。幾晩かあとで、矢篠というお茶屋に、招待客として顔を出したらしいと聞きましたので、私は豆葉の家へ飛んでいって、着替えをいたしますと、袱紗ふくさにつつんだ菓子折をかかえて、いざ矢篠へと向かいました。

これはお茶屋さんとしては新しい店です。洋風の建て方をしていますが、それなりに洒落て

はおりまして、黒っぽい梁を見せたような室内になっていました。それにしても、畳の部屋に座卓を置いて、まわりに座蒲団というのではなくて、この晩に私が通された部屋は、しっかりした板の間に、色の濃いペルシャ絨毯、小ぶりのテーブル、ふかふかの椅子というような具合です。正直なところ申しまして、椅子に坐ろうという考えが出ませんでした。豆葉を待つつもりで、絨毯の上でかしまつていたのですけれども、硬い床板で膝が痛くなりました。三十分くらい、その格好でいましたが、やって来た豆葉は、

「何してますのん。日本間やおへんのどっせ。椅子に腰掛けて、平気な顔しといやす」

私は言われたとおりにして、豆葉も向かい合わせに坐りましたが、ひとのことを言ったわりに、豆葉だって腰が落ち着かないようです。

どうやら院長は次の間の宴会にいます。すでに豆葉はそっちへ行っていたのです。手洗いに立たはるように、たんとおビールついできたんや。立たはったら、うちが廊下でつかまえて、こっちへ来てくれはるよう頼むさかいに、あんたは早いとお渡ししいや。先生がどうしやはるかようわからへんけど、この機を逃したら、初桃さんにやられっぱなしで、取り返しがつかへんやろ」

豆葉が立っていった、私はしばらく待たされました。体が火照って、気ばかり焦って、こんなに汗をかいたら、白塗りの顔が寝起きの蒲団のようにぐしゃぐしゃにならないかと心配で、何か気の紛れるようなものはないのかと思いましたが、壁掛けの鏡の前へ行って、ちらちら顔を見るくらいがやっとでした。

ようやく、しゃべり声がして、ドアをたたく音があり、そのドアを豆葉が大きくあけました。「先生、お手間はとらせまへんさかい、なあ」と、豆葉が言っています。

廊下の暗がりに蟹の院長がいて、銀行に掛かっている肖像画のような難しい顔をしていました。眼鏡の奥から私をのぞいているようです。私はどうしたらいいのかわかりません。普通なら、手についてお辞儀するところでしょう。豆葉がいやがるだろうとは思いましたが、いつもの伝で、畳の上と同じように、絨毯の上で膝をそろえてしまいました。そんな私を、院長は見もしなかっただろうと思います。

「あっちが宴たけなわでね」と、豆葉に言っていました。「では、失敬」

「あ、先生、さゆりから差し上げるもんがあんのどす。ちよつとだけ、お待ちやしてくれやす」豆葉は院長を手で招き入れ、どうにか椅子に沈み込ませました。そうしたら、さっき私に言ったことはどこへやら、豆葉も私と一緒にあって、それぞれが院長の左右の膝へしがみつかんばかりに手をついたのです。盛装の芸妓と舞妓を膝下に從えて、先生もさぞかしお大名気分だったことでしょう。

「このところご無沙汰してしましまして」と、私は切りだしました。「すっかり陽気も暖こうなりまして、お目にかかりまへんうちに季節が変わつてしまふたような……」

院長は聞いているのかいなのか、じっと私を見返ただけです。

「先生、これをお収めやしてくれやす」と、私はお辞儀をしてから、院長の手元のテーブルに折箱を置きました。院長は、そんなものに触れようとは夢にも思わないと言いたげに、手を膝にのせたきりです。

「なぜ私に？」

ここで豆葉が口を添えました。「すんまへん、先生、うちがこの妓に言うたんどす。先生どしたら、お喜びやしてくれはりまっしゃる言うたんどっせ。それにちがいあらしまへんどっしゃ